

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十五年十月度 入選句（投稿総数二千十四句・一般投句数六百九十三句）

特選 選者 名和 永山

バラの字は書けねど薔薇の咲きくれし 愛知県名古屋市 小松 とみゑ

「薔薇」って、本当に難しい漢字ですね。
「バラの字は書けねど」と一気に言い切っています。この「書けないけれど」という作者の想いに、ふつと読者は引きつけられますね。「それでどうしたんだろうか？」その余韻に「薔薇の花がさいてくれました。ありがとう。」という気持ちが入った、後段の「薔薇の咲きくれし」で作者の薔薇が好きだ、そして感謝の想いが伝わりますね。

余生とは色なき風にきずくこと 福井県福井市 三ツ山 ひろし

年老いると、自分の残す人生をあれこれ考えるものです。ちようど、秋の寂しさをもった風が吹き抜けるかのように。「色なき風」は秋風のわびしく身にしむ感じを表す季語。まさにこれらの残された人生は、どんな色もついていません。これから進む一歩一歩が色づけてくれるのです。それに気づけ、どんな色にしようか、余生を十分に楽しみたいですね。

風吹かば風の音なる秋桜 大垣市 子安 浪子

秋風が爽やかに吹いている様子が「秋桜」によつて表されています。コスモスの風に揺れている様子が目に映ってくるようです。中七の「風の音なる」と下五の「秋桜」で、非常に軽い音が想像できます。一般的には、「風が吹く音」というと、北風などの強い風を思い浮かべますが、「秋桜」の季語の働きて、音のイメージが変えられました。

秀逸

蕉翁を慕ひ水都に小鳥来る 養老郡養老町 田中 紫香

夕日背に秋桜踊るワルツかな 大垣市 谷 彩虹

蒼天や群生なした曼珠沙華 大垣市 高田 雅章

楚楚とゆれ飛驒路に蕎麦の花匂う 大垣市 桐山 俊子

猫じゃらし丈低ければ低き風 大垣市 田中 雅子

蒼天に月とけ入りて今朝の秋 不破郡垂井町 北村 廣美

赤い羽根つけて華やぐ老の胸 大垣市 棚橋 みさを

ゆつくりと雲ゆつくりと秋深む 大垣市 伊藤 有紀

山肌の小さき薫塚千枚田 大垣市 三宅 ヒサエ

赤い橋映る水面の水澄めり 大垣市 伊藤 八重子

入選

吾にひとつ妻にふたつの桃を買ふ
 秋霖や隣家にともる喪の灯
 十五夜をお供にあるく至福時
 唐突に秋来る朝の風の色
 志秘めてコスモスしなやかに
 赤い羽根つけて指示せしガードマン
 女子会や話途切れぬレモンテイー
 街中に神輿かつぐやバイト生
 里山の畑なだらかや蕎麦の花
 菊の香やかかりつけ医の老い給ふ

大垣市 大西 誠一
 愛知県名古屋市 舘野 茂子
 大垣市 中尾 恭子
 大垣市 永井 田鶴子
 大垣市 白井 静子
 大垣市 藤井 早苗
 大垣市 片山 洋紅
 大垣市 木村 一句
 養老郡養老町 田中 秀子
 福井県福井市 三ツ山 しげこ

入選

秋すだれ陽ざしを透かし人光る
 落人のなごり棚田は稲架日和
 相席の夫婦も初老走り蕎麦
 新涼や髪なびかせて踏むペダル
 廃線の鉄路の錆びや草茂る
 日の吸ひて柿赤あかと照らすなり
 満月や合わせ鏡と人の言ふ
 意味もなくただただ悲しい秋の夕
 さつま芋皆で分けてなごむ部屋
 カーテンの少しそよぎて秋の風

大垣市 田辺 のり子
 大垣市 佐藤 すみ子
 不破郡垂井町 中嶋 笑子
 揖斐郡揖斐川町 栗野 みねお
 不破郡垂井町 富田 実郎
 大垣市 高木 豊子
 大垣市 中川 すえ子
 大垣市 林 ひとみ
 大垣市 祖父江 信子
 福岡県田川郡 成松 義紀

選者吟

なほ残る桜紅葉の道長し

永山